

医療的ケアが必要な子どもの在宅移行プロセスにおける母親の気持ちのゆれ

長友万里（応用看護学）

【キーワード】 医療的ケア・母親・在宅療養・気持ち・ゆれ

本研究の目的は、医療的ケアが必要な子どもの在宅移行プロセスにおける母親の気持ちのゆれを明らかにすることである。

研究参加者は医療的ケアを必要とする子どもの母親4名で、在宅療養期間が6か月から5年未満とした。

研究デザインはGrounded Theory Approachによる質的記述的研究であり、計2回ずつのインタビューを行った。分析方法は、インタビュー内容をデータ化し医療的ケアが必要な子どもの在宅移行プロセスにおける母親の気持ちのゆれについて分析を行い、カテゴリー化を行った。なお、本研究は宮崎県立看護大学研究倫理委員会の承認を得て実施した。

結果、以下のことが明らかとなった。

1. 医療的ケアが必要な子どもの在宅移行時の母親の気持ちの変化のプロセスとして、【受け止められない障がい・疾患】【現実を受け止められないままに告げられる在宅療養】から【親として子どもを在宅で育てる決意】、最終的に【だいじょうぶと思える在宅療養】への段階を経ている。母親は、医療的ケアを必要とする子どもとの生活を『普通のことと捉える家族一緒の生活』と『在宅に対する母親の思いを支える家族の理解』によって【親として子どもを在宅で育てる決意】を抱いており、『子どもが家で落ち着いていることで在宅でもだいじょうぶという思い』と『母親が感じとる子どもの変化』によって【だいじょうぶと思える在宅療養】へと変化していた。
2. 【だいじょうぶと思える在宅療養】までのプロセスにおける気持ちのゆれには、『看護師の時間をかけた自然な関わり』による『在宅療養への自然な流れ』などの【看護師の関わりによる変化】や【必

要な医療的ケアの理解】、『24時間付き添うことでわかる子どもの変化』という【母子同室による24時間付き添い】【子どもの苦痛軽減のため情報を得て行う医療処置の決断】という要因が影響していた。

3. このプロセスの中で母親は【入院中には看護師に表出することのない感情や思い】を抱えるが、自分の感情や思いを表出する場や方法を選択して、気持ちの整理を行っており、【母親が支えとしていた中心的サポート】を得ていた。

在宅療養を選択する上で母親は、家族と一緒に暮らすことを「普通のこと」と捉えていた（『普通のこととして捉える家族一緒の生活』）。試験外泊時などに子どもが自宅で病院より落ち着いていることで「在宅でもだいじょうぶ」と思えるようになっていた。看護師は、こうした自宅での状態の落ち着きなど子どもの力に着目し、子どもの反応の変化を母親と共有しながら関わる大切であると考えている。母親は、『看護師の時間をかけた自然な関わり』によって『在宅療養への自然な流れ』を感じており、技術の習得や在宅サービスの調整などだけでなく、自然に接する関わりの必要性が見出された。